

【主な出来事】

日本藻類学会創立 60 周年記念

日本藻学者年表

2012 年版

年表中の人名は敬称を省略し、図中でフルネームが示されている藻学者については姓のみを記述しました。本図に使用されている画像は、主に日本藻類学会誌『藻類』に掲載された遺稿文などの図や、個人から提供を受けた写真を加工したものです。転載および複製を禁止します。

- 1853 米国ペリー艦隊 (黒船) の S.W. Williams と J. Morrow が下田・箱館で海藻を採集
1854 ロジャーズ艦隊 (黒船) の C. Wright が琉球・下田・箱館で海藻を採集
1860 W.H. Harvey "Characters of new algae..." (ライトが日本で採集した新海藻。新種記載のみの抜粋、全体は 99 年後に発表)
1866 G. von Martens が長崎・横浜で海藻を採集
1868 田中芳男、舎密局にて外国人教師 K.W. Gratama (ハラタマ) を補助して海藻着紙乾酪を製す
1872 田中芳男『林部氏植物綱目表』(Algae = 藻類)
W.F.R. Suringar、シーボルト標本を研究し、"Algae Japonicarum" (日本の海藻) を出版
齋田功太郎
矢田部、W.G. Farlow に海藻研究法を学ぶ
東京大学理学部の創設 (植物学教授に矢田部)
F.R. Kjellman、Vega 号で来日 (後年 30 数種を新種記載)
開拓史の宮部、東大に派遣、矢田部に師事 (-1882)
F.R. Kjellman & J.V. Petersen、日本近海産コンブ類の研究
J. Roy & J.P. Bisset、日本産鼓藻の研究
東京帝国大学三崎臨海実験所設立
大久保三郎ら、伊豆大島でアナニシキなど海藻数種を採集
齋田、輪藻とカワモズクを報告。勝山忠雄、温泉藻を採集
岡村、帝国大学大学院入学、矢田部のもとで藻類研究を開始
岡村清猷『有用藻類第一編』
矢田部、『日本植物図解』でカワノリを記載。P. Hariot が P.A.L. Savatier の標本をもとに横須賀の海藻を記載
牧野富太郎、東京産シシメ属の一種を報告
安田篤、不惑池からミドリムシを報告。E.M. Holmes が、大久保三郎と齋田の相模湾海藻標本から 23 新種を記載
F.R. Kjellman、日本のアマノリ属研究。岡村、水産伝習所講師
岡村『海藻学汎論』、『日本海藻図説』(-1902)
岡村『日本藻類名集』。宮部『北海道昆布科植物』
遠藤『海藻標本調査報告』(「焼付け」の語を使用)
1906 山内、イトグサ型生活環の核交代を解明
岡村『日本藻類図譜』(-1942)。遠藤、札幌農学校教授、『Fucaeeae of Japan』(「藻類花」1909)。池田菊苗、昆布から旨味成分を発見
東北帝国大学忍路臨海実験所設立
山内、ムチモ型の核交代を解明 (-1912)、岡村『浅草海苔』
田原、ヒバマタ科の胚発生の研究
1911 遠藤『水産植物学』
1914 京都大学大臨湖実験所設立
岡村『日本藻類名集』第二版 (東が淡水藻を担当)
川村多治治『日本淡水生物学』。北海道帝国大学開学
遠藤、アイヌワカメ属のモノグラフ
石川、アサカサノリの細胞学的研究
西村真琴、マリモ球化の研究
1926 三宅、コンブの有性世代を発見
1929 東京文理科大学設立 (1949-78 東京教育大、1973 筑波大)
岡村『藻類系統学』。山田『邦産藻類考察 I-X』(-1944)
北海道帝国大学理学部創設 (山田、植物学助教。翌年教授)
同大学理学部付属海藻研究所創設 (室蘭)。畑田『水産植物学』
岡枝、ヒトエグサの生活史解明。三輪、細胞壁の生化学研究
岡村『原色海藻図譜』。東『原色日本海藻図譜』
1936 岡村『日本海藻誌』。根来『日本湖沼の浮遊性藍藻』(-1937)
1939 岡村『日本陸花植物図鑑』(藻類)
1940 永井『千島海藻誌』(-1941)。江本・廣瀬『日本産温泉植物の研究』(-1952)。奥野、電顕による珪藻殻の研究 (-1953)
新崎、アオサ科・ヒトエグサ科の発生学的研究
猪野『海藻の発生』。廣瀬、イデユコムの葉緑体を観察
木下ら、昆布養殖の可能性を提議。東京水産大学設立
【英国の K.M. Drew がノリの Conchocelis 期を発見】
1952 日本藻類学会設立 (初代会長：山田)
『藻類』創刊。太田扶桑男、アサカサノリ人工採苗技術の開発。
大槻洋四郎、配偶体採苗によるワカメ養殖の開始
今堀『日本産藻類総説』。時田『樺太海藻誌』。猪野『植物組織学』
1956 潮川『原色日本海藻図鑑』
1959 廣瀬『藻類学総説』。E.Y. Dawson、ハーベイの遺稿を発表
小久保清治『浮遊珪藻類』。千原光雄、カギノリ科の生活史解明
1961 梅崎『日本の海産藍藻類』
1963 須藤、ノリの異種交配。館脇正和、ヒトエグサ属の生活史解明
1964 新崎『原色海藻検索図鑑』。加崎、車軸藻類のモノグラフ
阪井、シオグサ属のモノグラフ
1966 中村・館脇正和、カヤモノリ科の生活史を解明
1967 石田清治、ワカメ属の異種交配に成功
1969 長谷川、昆布の促成栽培技術の確立
1970 千原光雄『標準原色図鑑全集 海藻・海浜植物』
国際海藻学会議、日本開催 (札幌)。日米科学協力セミナー
I.A. Abbott・黒木 "Contribution to the systematics of benthic marine algae of the North Pacific" (北太平洋産海藻の分類学)
日本藻類学会第 1 回大会 (東京学芸大)
廣瀬・山岸高旺『日本淡水藻類図鑑』
西澤・千原光雄『藻類研究法』
1979 千原光雄『学研生物図鑑 海藻』
1984 山岸高旺・秋山『淡水藻類写真集』(-1998)
1985 吉田忠生『日本産海藻目録』(5 年ごとに改訂)
1986 秋山・有賀祐勝・横浜康継ら『藻類の生態』
1991 第 4 回有用海藻分類学ワークショップ、日本開催 (札幌)
1993 堀『藻類の生活史集成』(-1994)。川崎昭二『日本産コンブ類図鑑』
1995 『藻類』を和文誌と英文誌 "Phycological Research" に分離
1998 吉田忠生『新日本海藻誌』
1999 千原光雄『藻類の多様性と系統』。山岸高旺『淡水藻類入門』
2000 C. van den Hoek & 千原光雄、海産シオグサ属のモノグラフ
熊野茂『世界の淡水産紅藻』。環境省 RDB、71 分類群の藻類を掲載
2002 日本藻類学会『21 世紀初頭の藻学の現況』。西澤 "Seaweeds Kaiso"
黒岩祥彦ら、シアニドイオンソンの全ゲノム解読
2004 正田正夫『有用海藻誌』
2006 井上勲『藻類 30 億年の自然史』
2009 第 9 回国際藻類学会議、日本開催 (東京)
2012 日本藻類学会創立 60 周年

YATABE, FROKICHI (1851-1899) SAIDA, KOTARO (1851-1899) OKAMURA, KINTARO (1859-1924) TAKEBA, HISAYOSHI (1883-1972) OKADA, YOSHIKIZU (1902-1984) YAMADA, YUKIO (1900-1975) MIKAMI, HIDEO (1918-2005) 長谷川由雄 (1919-2011) 黒木宗尚 (1921-1988) 岩本隆三 (1922-2004) 梅崎勇 (1925-1995) 館脇正和 (1929-2005) 阪井和志雄 (1923-1989) 秋山優 (1928-1998) 田中伸雄 (1929-1998) 船橋説往 (1924-2004) 糸野洋 (1943-1987) 市村輝直 (1939-2006) 渡邊真之 (1941-2009) 岡村 (1921) 『日本藻類図説』 第 4 巻第 5 号第 175 図の原因

藻類 ④
藻類 ⑤
藻類 ⑥
藻類 ⑦
藻類 ⑧
藻類 ⑨
藻類 ⑩
藻類 ⑪
藻類 ⑫
藻類 ⑬
藻類 ⑭
藻類 ⑮
藻類 ⑯
藻類 ⑰
藻類 ⑱
藻類 ⑲
藻類 ⑳
藻類 ㉑
藻類 ㉒
藻類 ㉓
藻類 ㉔
藻類 ㉕
藻類 ㉖
藻類 ㉗
藻類 ㉘
藻類 ㉙
藻類 ㉚
藻類 ㉛
藻類 ㉜
藻類 ㉝
藻類 ㉞
藻類 ㉟
藻類 ㊱
藻類 ㊲
藻類 ㊳
藻類 ㊴
藻類 ㊵
藻類 ㊶
藻類 ㊷
藻類 ㊸
藻類 ㊹
藻類 ㊺
藻類 ㊻
藻類 ㊼
藻類 ㊽
藻類 ㊾
藻類 ㊿
藻類 ㊿

【年表の写真】
① 遠藤吉三郎『海産植物学』(1911)の表紙の金文字
② 1933年、北海道帝国大学理学部植物学教室 (札幌)の教授、山田伸男 (右)を訪ねた岡村金太郎 (水産講習所名誉教授)
③ 岡村金太郎『日本海藻誌』(1939)の表紙の金文字
④ 日本藻類学会和文誌『藻類』の表紙の金文字
⑤ 1977年に開催された第1回日本藻類学会大会の集合写真
⑥ 日本藻類学会英文誌 "Phycological Research" の表紙の金文字
⑦ 2009年に開催された第9回国際藻類学会議 (IPC9)のロゴ

日本藻学者年表

1952年に設立された日本藻類学会が初めての還暦を迎えた。これを祝い、記念事業のひとつとして、日本における主要な藻学者を配した藻学史の年表をポスターの形で制作し、本号に同封することになった。この扉はその縮小版である。

本年表は、約70名の藻学者（故人のみ。藻学以外を本分とした研究者も含めた）を取り上げ、その生没年を示すバーを藻学の略年表に組み合わせて作成されたものである。ある程度、師弟関係がみえる配置を心がけた（ただし、実際の関係は網目状なので厳密ではない）。たとえば、紫色のバーは岡村金太郎の弟子や孫弟子にあたりと考えられる藻学者である。

年表の時間軸は、いつをもって日本の藻学のはじまりとするかにまだ定説が無いため、矢田部良吉（1891年にカワノリを新種記載）が生誕する前年の1850年よりはじめた。ただし、それ以前になにもなかったわけではない。江戸時代にも寺島良安著『和漢三才圖會』（1712年）などのように有用藻類を記述したものがあつた。それらは植物学ではなく本草学の範疇に入るが、近代藻類学へと繋がるものであつた。一方、日本の藻類についての植物学的な記述は、1690年来日したドイツの探検家ケンペル（E. Kämpfer）が著した『廻国奇観』（1712）中の『日本植物』が嚆矢と考えられる。奇しくも今年、『和漢三才図会』と『廻国奇観』が著されてからちょうど300年目（5回目の還暦）にあたるけれども、いずれも日本藻学のはじまりとは認定

しにくい。日本人がなした植物学での藻学論文は、おそらく齋田功太郎の『東京産輪藻科植物』（1887）が第1号となるだろう。これをもって本邦藻学の開始とするなら、今年日本藻学125周年となる。ただ、齋田も矢田部と同様、その後の研究の重心を藻学以外のところへ移したため、藻学者と呼ばれることは稀である。藻学を専攻した日本人では、やはり岡村金太郎が筆頭であり、帝国大学を卒業した岡村が大学院に入り、矢田部のもとで研究を開始した1889年を「わが国における藻学研究所の歴史」が始まったとする説がある（千原1982）。この年は岡村がはじめて藻類について著作を行った年であつて、日本藻学史において重要な年であることは間違いない。

年表の制作に際しては、可能な限り正確を期したつもりであるが、まだまだ完成とは呼べない。とりわけ載せるべき藻学者が網羅しきれていないことは大きな反省点である。歴史年表をつくるには、先に各「出来事」の学術的・社会的な意味や後世へ与えた影響を評価する歴史研究が不可欠なのであるが、藻学史について本格的に研究を行う分野が我が国になく、後述する文献を除けば、植物学史や博物学史のなかでわずかに触れられる程度の情報しか得られないことがこれを難事業にしている。つまり、日本の藻学史研究はほとんどなされていない状態であると言わざるを得ず、そのことがさらに藻学史上の重要な情報や資料を残されにくくするという悪循環を産んでいる。本年表は、広範囲の文献はもとより、各会員や関係機関が所蔵している歴史資料から情報を集め統合しないかぎりには完全版に近づけるものではなく、今後、この年表（2012年版）を叩き台にし、欠けている部分について学会員諸賢より情報を提供いただき、改訂をすすめることができれば幸いである：情報提供は、〒305-0005 つくば市天久保4-1-1 国立科学博物館植物研究部北山太樹（E-mail: kitayama@kahaku.go.jp）まで。

これから次の還暦を目指して躍進する日本藻類学会が、学会と藻学の歴史を創ると共にその記録や資料保存も行い、未来の研究者へ供されることを願ってやまない。

主な参考文献

新崎盛敏 1982. 水産科学分野における藻類研究の歩み. 藻類 30: 390-400.

千原光雄 1982. 藻類. In: 日本植物学会百年史編集委員会 (編). 日本の植物学百年の歩み. pp. 90-99. 日本植物学会. 東京.

廣瀬弘幸 1959. 藻類学総説. 内田老鶴圃新社. 東京.

廣瀬弘幸 1982. 日本における藻類分類学と形態学の進歩. 藻類 30: 370-377.

大場秀章 1996. 黎明期の日本植物研究. In: 大場秀章 (編). 日本植物研究の歴史—小石川植物園三〇〇年の歩み. pp. 67-83. 東京大学総合研究博物館. 東京.

山岸高旺 1977. 日本淡水藻類図鑑. 内田老鶴圃新社. 東京.

(国立科学博物館 北山太樹)

